

低下していた。また、rMFG-E8 投与群ではアポトーシス細胞数が低下していた。また、虚血再灌流障害で重要とされる炎症性サイトカインに対する MFG-E8 の影響をリアルタイム PCR 法で検討した。rMFG-E8 投与群では炎症性サイトカイン (TNF- α , iNOS, IL-1 β , CCL-2, IL-6) の発現が有意に低下していた。

以上の結果より、MFG-E8 は皮膚虚血再灌流障害において、炎症性マクロファージの浸潤、炎症性サイトカインやアポトーシスなどを抑制し、さらに血管新生を促すことが示唆された。褥瘡やレイノー現象などの虚血再灌流障害に対して、MFG-E8 の治療への応用も期待できる。

20. 口腔扁平上皮癌の予後予測における ^{18}F -FDG および ^{18}F -FAMTPET の有用性

金 舞,¹ 樋口 徹也,² 有坂有紀子³
福島 康宏,³ 宮崎 英隆,¹ 対馬 義人²
横尾 聡¹

(1 群馬大院・医・顎口腔科学)

(2 群馬大院・医・放射線診断核医学)

(3 群馬大医・附属病院・放射線部)

【目的】 L-3-[^{18}F]-fluoro- α -methyltyrosine (FAMT) は、L 型中性アミノ酸であるチロシンの ^{18}F ポジトロン標識薬剤である。われわれは、口腔扁平上皮癌における半定量的パラメーターの予後予測における有用性について検討した。【材料及び方法】術前に PET 検査 (^{18}F -FDG, ^{18}F -FAMT) を施行した 50 人について、腫瘍原発巣における SUVmax、腫瘍全体の大きさや広がり反映する metabolic tumor volume (MTV) と total lesion glycolysis (TLG) を計測し、それぞれの全生存率および無増悪生存期間について比較し検討した。【結果】単変量解析を行った結果、全生存率では FDG SUVmax, MTV, TLG, FAMT MTV, FAMT TLR, 性別、分化度 ($p < 0.05$) において有意差を認め、無増悪生存期間においては分化度 ($p < 0.05$) のみ有意差を認めた。また多変量解析の結果、全生存期間における FAMT の MTV のみが独立した予後予測因子であった ($p < 0.05$)。【結論】口腔扁平上皮癌における全生存期間について、FAMT を用いた MTV が独立した予測因子となることが示唆された。

21. 口腔癌に対する放射線薬物療法中に発症した頭蓋内合併症の 2 例

清水 崇寛, 高山 優, 武者 篤
牧口 貴哉, 宮崎 英隆, 横尾 聡

(群馬大院・医・顎口腔科学)

【はじめに】今回われわれは口腔癌に対する放射線薬物療法中に発症した脳静脈洞血栓症および白質脳症という

まれな頭蓋内合併症の 2 症例を経験したので報告する。

【症 例】症例 1: 25 歳男性。右舌癌にて当科受診し舌部分切除を施行した。約 1 年半後右上内頸静脈リンパ節転移が認められ、頸部郭清術を施行した。病理組織学的にリンパ節被膜外浸潤が認められ、放射線照射+PF 療法を行った。PF1 クール終了後より改善のない激しい頭痛および悪心を呈した。脳 MRI にて右横静脈洞～右 S 状静脈洞に血栓形成を疑う所見が認められ、横静脈洞血栓症と診断された。撮像直後より抗血栓療法を開始し、症状は改善傾向を示した。症例 2: 64 歳男性、右舌癌にて当科受診し舌部分切除術施行した。約 2 か月後右顎下リンパ節転移が認められ、頸部郭清術を施行した。病理組織学的にリンパ節被膜外浸潤が認められ、放射線照射+PF 療法を行った。投与 5 日目に口のもつれが出現したため、脳 MRI を撮像した。白質、脳梁に広がる左右対称性の拡散低下像を呈した。白質脳症と診断された。5-FU の投与を中止し、ステロイド投与を開始後に症状が改善した。【結果およびまとめ】脳静脈洞血栓症および白質脳症はまれな疾患ではあるが、死亡例の報告もあり、薬物療法施工時には考慮すべき重篤な合併症である。

22. Protection of Sodium Selenite Supplementation on Normal Human Esophageal Cells (CHEK-1) in Radiotherapy

Irma M. Puspitasari,^{1,2} Chiho Yamazaki,¹

Rizky Abdulah,² Mirasari Putri,¹

Satomi Kameo,¹ Takashi Nakano³ and

Hiroshi Koyama¹

(1 Department of Public Health, Gunma University Graduate School of Medicine)

(2 Department of Pharmacology and Clinical Pharmacy, Faculty of Pharmacy, Universitas Padjadjaran, Indonesia)

(3 Department of Radiation Oncology, Gunma University Graduate School of Medicine)

【Background】Administration of radioprotective agents has been suggested for prophylaxis against side effects of radiotherapy. Selenium is one of suggested radioprotective agents. In our review paper on clinical studies of selenium supplementation in radiotherapy, we found that selenium supplementation may offer specific benefits for several types of cancer patients who undergo radiotherapy (Puspitasari IM et al., 2014). However, the evidence and mechanisms that selenium can protect normal cells during radiotherapy are still insufficient.